

解 答

- 【一】 問一 別のものの製造への転用が可能であるということ。
 問二 刀の技術を失うことは、ものをつくる際の基本的な道具である刃物全体の技術をも失うことを意味するから。
 問三 道具がなくなり、熟練した技術を発揮できなくなる点。
 問四 大量生産された新しいものに次々ととびつくのではなく、熟練した職人の技術が生んだ一つのものを長く使い続けるよう考え直す。
- 【二】 問一 A オ B ウ
 問二 熱心にライフルの手入れをしているジョンの姿を見て、一人前のハンターに成長したことを喜び、たのしく思う気持ち。
 問三 こみ上げる悲しみの涙を何とかおさえこもうとする様子。
 問四 イ
 問五 だれでもいつかは必ず死ぬのだから、変えることのできない運命をいたずらになげくのではなく、静かに受け入れてほしいということ。
 問六 クレイが少しでも長くそばにいてくれることを願う気持ち。

- 【三】 ① 利益 ② 究極 ③ 検査 ④ 運賃 ⑤ 討論
 ⑥ 標準 ⑦ 憲法 ⑧ 任務 ⑨ 炭酸 ⑩ 序列
 ⑪ 貧〔しい〕 ⑫ 導〔く〕 ⑬ 痛〔む〕 ⑭ 粉 ⑮ 筋

解 説

- 〔一〕 出典は栄光学園国語科による、ものをつくる「技術」の盛衰をテーマとする説明的文章。
- 問一 「ものづくりにおける人間の技術」の「柔軟性」については、「靴生産地として」一大発展した兵庫県豊岡市の例が挙げられています。「日本独特の柳行李を製造する技術と、西欧伝来の靴を製造する技術は、一見すると全く別のもの」であるにもかかわらず、「ものづくりにおける人間の技術」は「非常に柔軟」であることから、「**柳製品製造の歴史でつちかわれた技術**」を「**いろいろ工夫して靴製品に適用**」することはさして難しいことではありませんでした。
- 問二 私たちは「実際の生活の中で刀がつかわれなくなったのだから、べつに刀の技術などなくても困らない」とつい思ってしまいます。ところが、「**刀の技術**」とは「単に日本刀だけではなく」「**ものをつくる際の基本的な道具**」である「**刃物全体の技術に直結**」するものです。刀の技術が失われるということは、単により日本刀がなくなることにとどまらず、**刃物全体の技術の衰退**を招き、ひいてはものづくりの根本を揺るがしかねない大変な危機に至ることを意味しています。
- 問三 「熟練した職人による技術が消滅の危機にある」のはもちろんなのですが、実はそれ以前に（「永六輔氏」が紙漉きにつかう鉋を探し回ったように）「職人よりも彼らがつかう道具の方が先に無くなってしまう」ということのほうがより危機的な状況であると言えます。職人たちが**熟練の技を発揮しようにも、道具がなくなってしまうばどうすることもできません**。伝統技術を守りたくても守ることができない職人たちの苦悩がここにあります。
- 問四 伝統的な技術や道具が消えていくという風潮には「つくる側」とともに「つかう側」の変化も大きく関わっています。「つくる側」が「手間や時間のかかる技術」を「時代おくれのもの」として軽視し、「大量生産」に傾いた結果、「社会全体にもものがあふれる」ようになりました。すると、「つかう側」も「次々に新しいものととびつくようになり、一つのを長くつかい続けるようなことは無くなってしまい」、結果的に「熟練した職人に依存するような技術の消滅」に拍車がかかることになってしまいました。けれども、「一つの技術がとだえることは、新たな技術の発達の可能性の芽を摘んでしまうこと」を意味します。「技術の消滅に歯止めをかける」には、まずは「つくる側」はもちろんのこと、「つかう側」もこれまでのような「**新しいもの好き**」を改め、**熟練した職人の手による上等な一品を長くつかおうとする姿勢**が求められます。

[二] 出典はゲイリー・ポールセン「はてしなき追跡」。

問二 「解禁前夜の気持ちのたかぶりをおさえきれない」 ジョンは「銃を手にしてみがきはじめ」ます。明日から始まる狩猟のことを思って気持ちを高ぶらせながら、分解したライフルの部品を「ひとつひとつきれいにみがいて」いる姿はクレイの目には頼もしく映ったことでしょう。四歳の時からクレイとアガサに育てられ、十三歳になったジョンは明日初めて一人でシカ狩りに出かけます。クレイは熱心に銃の手入れをするジョンの姿を眺めながら、**一人前のハンターに成長した孫をほこりに思い、目を細めてうれしそうにうなずいています。**

問三 今年の猟はジョン一人で行くことになっています。病に冒されているクレイが一緒に行けないことはわかっているのに、寂しさに耐えかねたのでしょう、ジョンはつい「いっしょにきてくれればいいのに」とつぶやいてしまいます。けれども、クレイの返事は当然「NO（ノー）」であり、ジョンは改めて悲しみをつのらせます。クレイが猟に行かないのは「手のほどこしょうのない癌」が原因であり、猟の話はすなわちクレイの「死」につながるものとなります。クレイは「今年は」猟に行かないわけではありません。もう自分はクレイと一緒に猟に出かけることはないのだという**悲しい現実を改めて強く実感した**ジョンは、**こみあげてくる涙**をクレイに気づかれぬよう、必死でこらえています。

問四 会話はとぎれ、ジョンとクレイのあいだに「沈黙」が訪れます。悲しい会話を聞いていたアガサは、黙りこむ二人の姿を見て思わず涙をこぼしてしまいます。沈痛な面持ちの孫とすりなく妻。部屋中を包みこむ重い空気に耐えきれなくなったクレイは、つい「しめっぱいのはたくさんだ。めめめするのでもいいかげんにしろ」とアガサに向かって声を荒らげてしまいます。アガサは泣きながら台所を出て行き、再び訪れた沈黙の中で、「そもそも、家で悪態をつくような人ではない」クレイは冷静を取り戻し、アガサを責めるようなことばを口にしてしまったことを後悔します。「悪気はない」クレイでしたが、ジョンやアガサが自分の死を悲しんでいることに耐えられませんでした。二人が**自分のことで胸を痛めていることは重々承知**の上で、なおそういう雰囲気を拒絶する気持ちが強く働いたことで、クレイはアガサに**きついことばを浴びせてしまった**わけです（→イ）。

問五 悲しむ二人に向かって、クレイは「わしの身に起こっていることは、この地球に生きていれば、だれにだってかならずいつかは起こることなんだ。だれだって、逃げもかくれもできんだ」と自分の思いを語り始めます。**命あるものには必ず死が訪れる。**自然の摂理であり、**変えようのない運命**なのだから、「逃げもかくれも」せず、**その時が来るのを静かに待つ**べきである。クレイはジョンとアガサにも同じように自分の死を静かに受け入れてほしいと考えています。

問六 クレイはもどってきたアガサにかんしゃくを起こしたことを詫び、「すべてはまたもとどおりに動きだし」ます。クレイは猟に出かけるジョンに「シカを撃ったら、レバーをとってきてくれんかな」と頼みます。「とりたてのシカのレバーをオイルでさっと焼く〜これこそ、ほんもののごちそうってもんだ」と好物について語るクレイでしたが、「油はだめ」とアガサにやんわりたしなめられます。「まあ、いまさらあれこれ気にしたって、どうなるもんでもないさ」と粘るクレイに、アガサは「それでも、だめ」ときっぱり言い切ります。間もなく死を迎えるのだから、今さら身体のことを心配する必要もないだろうと割り切るクレイでしたが、アガサの考えは違います。クレイには身体のことを第一に考えてほしい。クレイの言うとおりに、死ぬことは避けられないのかもしれない。それでも、**一日でも一分でも一秒でも長く生きていてほしい、そばにいてほしい、**とアガサは強く願っています。